現役の教師と元教師が地域の人たちとともに立ち上げた豊かな心が学べる

無料の沖洲放課後クラブ（愛称コロバクラブ）

～特別な支援が必要な子どもたちを中心に～

１．　はじめに

今から約１０年前徳島市内の福島小学校で、県下で初めての自閉症通級指導教室が設置され、私はその初代担任に任命された。福島小学校は、その校区に児童養護施設を抱えているため、教室に集まってきた子どもたちには、被虐待児が多かった。そして、すぐに「暴れる、すねる、どくれる、切れる」子どもたちには、自尊感情や自己有用感が乏しく、他者理解や他者受容も乏しかった。何とかして、「自分って素敵だな。」「仲間っていいな。」と感じて貰いたい、そう願いながら試行錯誤の実践を積み重ねてきた。その中で集団で行なうソーシャルスキルゲームの有効性を確認することができた。

だんだんと教室の子どもたちが穏やかに伸びやかに成長してくる中で、ふと気が付くと一般家庭の子どもたちや発達障害の診断を受けていない通常学級の子どもたちにもこのソーシャルスキルゲームの必要性が、痛感されるようになった。しかもその必要性は、放課後の子どもたちの不健全な姿が助長させていることが分かってきた。

もしも放課後の子どもたちに健全な放課後を提供し、ソーシャルスキルゲームを含む豊かな体験活動が保証されたなら、発達障害をもつ子もそうでない子も共に豊かに成長していけるのではないかと考えた。しかし、現役の教師を続けながらそのことは可能だろうか。時間的に経済的に体力的にやっていけるのだろうか。不安は尽きなかったが、それ以上に少しでも子どもたちやお母さん方に幸せになって欲しい、自分にできることなら何でもさせていただきたいと言う思いの方が勝ってしまった。

１２０坪の土地を購入し、３０坪のプレハブを建て、賛同者を募っていった。「こんなのができるのを待っていた。」「面白そう。ぜひ、やろう。」「どんな協力でもするよ。」と賛同者は、またたくまに８０名に達した。特別顧問の先生方も決まった。地域の有志の方々や徳島大学の学生たち４２名（大人２０名、学生２２名）のボランティア登録も完了した。そして、いよいよ沖洲放課後クラブに来る子どもたちを募集した。結果的には、ＡＤＨＤ、アスペルガー症候群、自閉症、不登校、保護者の児童遺棄をきっかけとした粗暴行動児童を含む４４名の子どもたちが共に学ぶことになった。１年生から６年生まで男女込みで実にバランスよく集まってくれた。

保護者の方々と面談すると発達障害がなくとも「一人っ子で母と子２人だけの放課後は息が詰まりそうだった。」「近所に遊べる子どもが誰もいない。」「いくら言っても宿題もせず、ゲームばかりしている。将来が不安。」「体と体が触れ合う遊びなど全くしていない。」「コミュニケーションの取り方が下手で、友だちができない。」等沖洲放課後クラブに寄せる期待の高さが伺われた。

そして、１０月９日いよいよ沖洲放課後クラブ開校式の日を迎えた。沖洲小学校からは、校長先生が金一封を持ってお祝いにかけつけて下さり、当日は２０名のボランティアさんの見守る中、コロバクラブ会長である十枝先生（徳島大学名誉教授）の挨拶を皮

切りに楽しくスタートすることができた。以下その実践の一端を述べてみたい。
　きっとこれらの実践は、不健全な放課後生活を余儀なくされている全国の子どもたちとその健全育成を願う大人たちへの一助となるにちがいない。

２．　沖洲放課後クラブの概要（全て別紙参照）
　① コロバクラブ募集要項
　② 当面の予算ならびに年間計画
　③ コロバクラブ役員名簿
　④ コロバクラブ会則
　⑤ ボランテイアスタッフ研修資料
　⑥ 最初の保護者面談と個別指導計画

３．　身に付けて欲しいソーシャルスキル（心理面）
　① 困った時に助けてと言える
　② 助けてと聞いた時にすぐ助けようとする
　③ 仲間で助け合う楽しさを知る
　④ 自分のよさを爽やかに語る
　⑤ 相手のよいところを素直に認める
　⑥ 自分の価値観と違う人と積極的に触れ合う
　⑦ 自分が誰かの役に立つ喜びを知る
　⑧ 全てのベースとなる自尊感情、自己有用感

４．　身に付けて欲しい主なソーシャルスキル（知識と技術面）
　⑨ コミュニケーションスキル
　　（上手に質問する、上手に頼む、上手に断る、きちんと謝る等）
　⑩ 簡単な調理と食生活全般の簡単な生活技術
　　（包丁の使い方、火の扱い方、食器の洗い方、拭き方等）
　⑪ 衣・住生活の簡単な生活技術
　　（掃除機の使い方、タオルの洗い方、ｶｯﾀｰや鋸や金槌の使い方等）
　⑫ 身体に関する知識と技術
　　（怪我をしたときの手当ての仕方、おやつの選び方、食品添加物の知識等）

※　これらのスキルは、取り立てて特設の体験コーナーで学ぶこともあるが、毎回のおやつタイムの後で、自分の湯飲みを洗って拭く、当番になった人が最後にトイレのタオルを洗い、掃除機をかける等常時活動の中で自然に見に付くよう配慮している。１つのグループは、６～７名異年齢集団で、１つの家族の形態をとっており、グループの中でお父さん役、お母さん役、お兄さん役、お姉さん役、タイムキーパーを決めている。チーム名はそれぞれ、あり、犬、馬、えび、オケラ、亀ファミリーである。宿題や自主勉強のときだけでなく、長机も自分たちで出し入れしなければならないので、自然に助け合う姿が見られる。

グループソーシャルスキルゲームの中では、もちろんチーム対抗のものが多いので仲間意識は、とても高くなっているし、評価の観点を成績のよしあしではなく、いかに助け合おうとしていたかに重点を置いているので、（例えば、「今の勝負は、ありファミリーの方が失敗した子に大丈夫だよとたくさん声かけをしていたよ。」等）温かい和やかな雰囲気の中で、楽しく活動できている。

５．　年間計画の中でのソーシャルスキル（特設）の位置付け・・・１０月の例

月　日	第２ｽﾃｰｼﾞ（集団ｿｰｼｬﾙｽｷﾙｹﾞｰﾑ）	第３ｽﾃｰｼﾞ（わくわく体験ｺｰﾅｰ）
10. 9	あっちっちっ助けてｼﾞｬﾝｹﾝ①②・林の中から⑤	どうぞよろしく会・マジックショー
10.12	あっちっちっ助けてｼﾞｬﾝｹﾝ①②・林の中から⑤	昔の遊び
10.16	大根抜きゲーム③･大中小ゲーム⑤	折り紙・切り紙⑪
10.19	大根抜きゲーム③・大中小ゲーム⑤	高齢者と遊ぼう⑥
10.23	電撃いらいらﾃｰﾌﾟｹﾞｰﾑ⑦･名刺押しつけｹﾞｰﾑ④⑨	お月見だんごを作ろう⑩
10.26	電撃いらいらﾃｰﾌﾟｹﾞｰﾑ⑦･名刺押しつけｹﾞｰﾑ④⑨	吉野川ひがたの生き物
10.30	私は誰？質問ゲーム⑨･あったか言葉とﾁｸﾁｸ言葉	ハロウィン・楽しい外国の話⑥

※ ○数字は、主にどの活動でどのスキルを身に付けさせるかを示す。

※ なお、第２ステージのゲームは基本的に火曜と金曜の２回同じことをするので自閉症の子どもたちも見通しが立てやすくなるし、支援者である学生ボランテイアさんも、２度目はﾒｲﾝﾃｨｰﾁｬｰになって指導できるようになっている。

６．　実践事例①「あっちっちっ助けてジャンケン」

少子化、過保護、過干渉の中で育っている子どもたちは、家でも学校でも困る前に手が差し伸べられ、自分が困っていても自分からは助けてと言えない子どもたちが増えている。また、逆に虐待や放任をされた子どもたちも「どうせ、言っても無駄。」とばかりに助けてと言えない無気力な子どもたちが増えている。

また、社会全体の自分さえよければいいと言う風潮に加え、他人に関わると恐いと言うイメージから、困っている人を見ても知らん顔の子どもたちも多い。

そこで、コロバクラブで狙う心理面でのスキルの第１と第２に「助けて」と言えること、「助けて」と聞けばすぐに助けようと行動することを掲げて、このゲームから活動を開始した。

まずは、数名の帽子をかぶった鬼がみんなをタッチしていく。タッチされた者は、その場にしゃがみ込んで大声で「あっちっちっ助けて。」とさけばなければならない。その声を聞くとすぐに霧吹きを持った２名のお助けマンが、水をかけに行く。そして、水をかけてくれた人は生き返れると言うゲームである。初めは、なかなか声の出なかった子どもたちも友だちの大声を聞いて、次第に大声で「助けて。」と言えるようになってくる。

また、日頃はいじめの側に立つことが多い元気な男の子たちが、進んでお助けマンになり、人を助ける心地よさを充分に味わっている。

７．　実践事例②「大根抜きゲーム」

テレビゲームの中のバーチャルな世界で遊ぶことの多い今の子どもたちは、スキンシップや体と体が触れ合うような活動をあまり経験していない。人間関係が希薄で、表面的な付き合いが多い子どもたちにぜひとも体全体を使った遊びをどんどん体験して欲しい。更には、仲間みんなで助け合う心地よさを体験的に味わって欲しいとの願いから、２つ目に選んだゲームは、「大根抜き」ゲームである。１チーム６～７名の子どもたちが、大根側と抜く側に分かれて競うとてもシンプルなゲームである。

まず、大根チームは足を伸ばして床に座り、抜かれないようにチーム皆で腕を組んでかたまる。抜く側は、時間内に出来るだけたくさんの大根をスタートラインまで引っ張ってくるのである。

いざ、スタートしてみると人の足など持ったことがない子どもたちは、抜く側も恐る恐ると言う感じである。大根側は、他人と腕を組むと言うことができず、一人でいるためにあっさりと抜かれていってしまう子が多い。

しかし、回数を重ねるうちに抜く側も大根側も力を合わせることが上手くなり、自然に助け合う心地よさを味わっている。最後に１０人の学生大根を子どもたち全員で抜いた時には、大きな歓声が上がった。

８．　実践事例④「名刺押しつけゲーム」

このゲームは、コミュニケーションスキルを高めるためのゲームで、一人４枚のカードのそれぞれに自分の呼んで欲しい名前と本名を書いて持っており、出会った人とジャンケンをして勝ったら自分の名前と得意なことを言いながら相手に自分の名刺を渡すゲームである。恥ずかしがって自分の得意なことを言えない子どもたちも多いが、自分のカードが早くなくなった人の勝ちなので、ジャンケンに勝った嬉しさと早くカードを渡したいためにいつの間にか、自分の得意なことを爽やかに紹介している。（ジャンケンで負けた子も友だちの名刺が貰えるので喜んでいる。）

９．　実践事例⑤「高齢者と遊ぼう」

コロバクラブのもう一つの大きな売りは、日頃触れ合うことの少ない人々との交流である。核家族化の進行は著しく、お爺ちゃんお婆ちゃんと接したことのない子どもたちも多い。しかし、ここにはたくさんの高齢者の方々がボ

ランティアとして参加下さっている。

１０月１６日には、詩吟を学んでいる６名のお婆ちゃんたち（平均年齢７５歳）が朗々とした詩吟を聞かせて下さった後、折り紙やお手玉・おはじき・コマ廻しなどに分かれて子どもたちと一緒に遊んで下さった。子どもたちは、初めて見る凄い技の数々に目を輝かせ、自分たちもやってみたいと意欲的に教わっていた。

参加下さった高齢者の方々も「こんなに若い子たちと一緒に遊んだのは、初めてです。一生懸命話を聞いてくれるので、こちらも元気を一杯貰い、若返りました。来月も楽しみにしています。」と喜んで下さった。

１０．実践事例⑥「お月見だんごを作ろう」

季節感や日本古来の行事を大切にしたいと言うのもコロバクラブの大事なスタンスである。また、「食は命」と言う言葉があり、食育教育が叫ばれるようになって久しいが、社会全体の中では、個食や孤食が問題になっている現在、子どもたちにはぜひとも調理の楽しさとそのスキルを身に付けて欲しいと願っている。

丁度中秋の名月（十三夜）の日である 10 月 23 日は、絹ごし豆腐とだんご粉をしっかりこねて、鍋でゆで、自分の好きなトッピングを載せた月見だんご作りを楽しんだ。どの子も自分でこねて、丸めて、茹で上げただんごをそれはそれは幸せそうにほうばっていた。これは、子どもたち４０名に対してボランティア１０名と言う恵まれた環境の中で、どのチームの鍋にも１～２名のボランティアさんがついて実現したことである。チームのお世話役である高学年の子どもたちも低学年の子どもたちの面倒を見ながら自分たちものびのびと楽しく活動していた。

１１．おわりに

ほんとうにこんなことが実現するのだろうか、はたして学生ボランティアさんは集まるのだろうかと不安で押し潰されそうになりながら、それでも子どもたちや保護者の幸せを願っているならきっと何とかなる、必ず助けは来ると信じてスタート切った。そして、蓋を開けてみれば、何と 22 名もの学生がボランティアスタッフ研修会に集まってくれた。

今、コロバクラブに来てくれている学生は、全員県外出身で下宿生活をよぎなくされている。だから、コロバクラブに来れば友だちに会えるし、子どもたちには喜ばれるし、ソーシャルスキルのゲームが学べるしで、嬉しく楽しいのだと喜んでくれている。

もちろん、保護者や子どもたちからは、コロバクラブの日が待ち遠しいととても感謝されている。自閉症のＳ君もアスペルガーのＭ君も身体を一杯使う集団のゲームの中では、何の支障もなく、みんなと一緒になって楽しく活動できている。

ソーシャルスキルは、楽しく活動する中でこそ身に付くと思う。楽しく学びながら、いつかふと気が付けば、「自分って素敵だな。」「友だちっていいな。」「人の役に立つって幸せだな。」と感じられる子どもたちに育って欲しいと願ってやまない。

保護者のための無料わくわく子育て勉強会は、すでに勝浦で始まっている。日頃の子育ての悩みを互いに出し合いながら、ミニワークやロールプレイを交えながら、よりよい子育てについてみんなで和気藹々のうちに楽しく学んでいる。

（文責　コロバクラブ事務局　　加戸　裕子）